

## ホラーティウスにおけるトロヤ戦争の英雄たち(2)

松 田 治

### Ⅲ ホラーティウスとホメーロス

ローマの夏は暑い。それで、古代ローマにおいても、余裕のある人々は、首都の炎天を避けて涼しい地方へ逃げた。我々の詩人ホラーティウスもその例に洩れない。マエケーナースの知遇を得てからは、彼にもこの程度のことではできるようになっていた。詩人の好んだ避暑地としては、マエケーナースから贈られたサビーニーの領地は言うまでもなく、ティーブル(現ティヴォリ)やプラエネステ(現パレストリナ)などが知られている。プラエネステの町は小高い所にあり<sup>1)</sup>、緑陰ゆたかで、従って夏は涼しい<sup>2)</sup>。この地に別荘を持っていたかどうか明らかでないが、ある年の夏、彼がここへやって来たことが書簡詩の一篇(*Epst.* 1, 2)によって知られている。

そこで詩人は我々に、ごく理想的な余暇の過ごし方を教えてくれる。すなわち、ローマの夏を逃れ、首都の喧騒を、もろもろの煩わしさを忘れて、彼はホメーロスを読むのである。当時の彼の読書が哲学書に限らなかったことが、これで明らかになる<sup>3)</sup>。詩人は、この読書をひとり楽しむだけでは終らせず、ロリウスという年下の友人に手紙を認め、その中でこの読書から得たもの、あるいは再確認したものを披瀝している。この手紙が上記 *Epst.* 1, 2 に他ならない。

そこで、詩人は、ホメーロスの『オデュッセイア』(以下 *Od.* と略記)の冒頭部分を自在に訳して、次のようにラテン語のヘクサメトロス

にのせている。

qui domitor Troiae multorum providus  
urbes  
et mores hominum inspexit latumque per  
aequor,  
dum sibi, dum sociis reditum parat, as-  
pera multa pertulit, ...

彼(ウリックス<sup>4)</sup>)はトロヤを征服したあと、注意深い眼で多くの人々の都市や習俗を観察し、広い海原で、自分と仲間たちのために帰路を捜し求める間に、数々の辛酸をなめた、...(*Epst.* 1, 2, 19-22)

ホラーティウスのこの訳文には、詩女神への呼びかけ(「ムーサよ、あの勇士のことを私に語って下さい」、*Ἄνδρά μοι ἐννεπε, Μοῦσα, Od.*, 1, 1)は省かれているが、*Od.* の冒頭部5行の内容をほとんどそのまま伝えている<sup>5)</sup>。六脚韻(ヘクサメトロス)をギリシア語からラテン語に移すことは、ホラーティウスにとってたやすいことだった。ローマの先達としては、既にリーウィウス・アンドロニクスがこの叙事詩をサートゥルヌス詩律で翻訳している(*Odissia*)。ホラーティウス自身、小さい頃既に、ベネヴェントゥム出身の辣腕教師オルビリウスの鞭にお

4) ウリックス(Ulixes)はオデュッセウス(*Ὀδυσσεύς*)のラテン語名であるが、本章ではラテン語原文の訳以外の場所ではオデュッセウスに統一しておく。

5) ホメーロスの文章では *ἴδε ἄστεα* (諸都市を見た)、*νόον ἐγνώ* (精神を識った)と動詞が二つあるが、ホラーティウスは動詞を *inspexit* と一つにまとめ、その代り原文に対応する語のない *providus* を新たに加えている。これはオデュッセウスの示した賢明さ、彼が得た認識を強調する狙いからであると考えられる(Kiessling-Heinze, 1968<sup>18</sup>, ad loc.). なお、*Od.* 1, 2 の *νόον* には *νόμον* の読みもあり(Zenodotos, Kiessling-Heinze, ad loc.)ホラーティウスの *mores* はこれに対応する。

1) *altum Praeneste* (Vergilius, *Aeneis*, 7, 682).

2) *frigidum Praeneste* (Hor. C. 3, 4, 22-3).

3) J. Fontaine, 'Les racines de la sagesse horatienne,' *L'Information littéraire*, XI (1959), 114.

びえつつ、この大先輩の翻訳を学んだのであり<sup>6)</sup>、またホメーロスの作品を直接ギリシア語で読んだ<sup>7)</sup>。彼がローマで「アキレウスの怒り」(iratus Achilles, *Epst.* 2, 2, 42) を学んだということは、とりもなおさず、彼が当時受けていた教育がラテン語、ギリシア語を併用するものであったことを示すようである<sup>8)</sup>。ギリシア語そのものに関して言えば、後に彼がいわば大学教育の仕上げを志してアテーナイへ留学したことは、そのギリシア語を本来の使用環境において練磨するのに大いに資した。

*Od.* を訳した例は「詩論」(*De Arte Poetica*)<sup>9)</sup>、以下 *A. P.* と略記) にも見られる。冒頭の2行だけで、ここでは詩女神への呼びかけもある<sup>10)</sup>。

ムーサよ、私に語って下さい、トロヤ落城の後、多くの人々の習俗と都市を見たあの勇士のことを (*A. P.* 141-2)。

この部分は、価値ある叙事詩をいかに開始すべきかを教えるための見本として、ホメーロスの作品の冒頭部を翻訳して見せた、一種の教材である<sup>11)</sup>。

ホラーティウスがギリシア語を楽にあやつたことはもとより明らかであるが、これを文学に即して習得するための教本は、少なくともオルビリウスの学校の段階ではホメーロスの叙事詩であった。従って、アンドロニクスの *Odis-*

*sia* を端緒として、このギリシアの大叙事詩人は、少年期の柔軟な精神に生涯を通じて払拭しえない痕跡を残したと言えよう<sup>12)</sup>。師の鞭を恐れながらホメーロスの詩句を読み、書き、覚えること、このような基本課業を果しつつ、徐々にホラーティウスの詩魂は胚胎し、育まれたのである。

そして彼は、自分の父や、マエケーナースに対してと同様に、この叙事詩の父からこうむった恩に十分に報いた。父は、年端も行かぬ少年を誘惑の多い大都会でまっすぐに歩ませたそのすぐれた教導ゆえに称えられ<sup>13)</sup>、マエケーナースは、ピリッピイ戦争以後の詩人の人生においてあらゆる面で支柱となってくれたことにより、憚るところなく謝辞を浴せられている。少年時代から叩きこまれたホメーロスの詩句は、いわば彼の血肉と化して全詩業にわたって随所に浮かび出る。さらに、ホメーロスの伝えたギリシア的精神も、ホラーティウス自身の研鑽を経て、人間の生き方を語る場合の有力な規範ないし尺度となっている。師の言葉と精神をラテン語に移して語るのものであるが、詩人の報恩の仕方としてこれを越えるものはない。そこには、哲学紹介に勤しんだキケローの場合、あるいはホメーロスの二叙事詩を基に「アエネーイス」を作した友人ウェルギリウスの場合とは異なる趣きがある。ホラーティウスは、無制限に追随することはないが、ホメーロスを「詩人の王」として敬うのである<sup>14)</sup>。

ローマの詩人たちは、ホメーロスに対するこの評価を、ギリシア人たち自身から継承した。詩人の王としての彼の地位は既にギリシア古典期において確立しており、その作品はギリシア人のありとあらゆる面での指針として仰がれていたのである<sup>15)</sup>。現実的に思考し、醒めた眼で

6) *Epst.* 2, 1, 69-71.

7) *Epst.* 2, 2, 41-2 では「幸運にも私はローマで教育を受け、そこでアキレウスの怒りがギリシア人たちにどんな災をもたらしたかを学んだ」として特に *II.* を学んだことを明示している。

8) Walter Wili, *Horaz und die augusteische Kultur*, 1965<sup>2</sup>, 23.

9) 本来は「ピーソーたちへの書簡」(*Epistula ad Pisones*) と称される作品。

10) ちなみに Liv. Andronicus は *Virum mihi, Camena, insece versum* と訳している (E. H. Warmington, *Remains of Old Latin*, II, 24).

11) Carl Becker, *Das Spätwerk des Horaz*, 1963, 83. Steele Commager は、専ら美学上の理由で Hor. は Hom. の形式を守るべきであるとした、と言っている (*The Odes of Horace, A Critical Study*, 1963<sup>3</sup>, 4).

12) Wili (260) は、Hor. に対するある詩人の全的影響があるとすれば、それはまずピンドロスであり、これは、Hor. の全作品に及ぼされた Hom. の影響に比肩するものとしている。

13) たとえば S. 1, 6, 65 以下。

14) Wili, 333.

15) 高津春繁「ホメーロスの英雄叙事詩」, 昭和39年, 2-8.

対象を見据えるホラーティウスは、詩人として、自身の天賦の抒情性を見誤らず、本分を守り通し、終生叙事詩作制を避けた。しかしこのことは、その作品に様々な形で「ホメーロスのもの」が入ることを妨げはしなかった。抒情詩と叙事詩というジャンル上の極性があるだけに、ホラーティウスにおけるホメーロスの存在は詩の枠をも越えたものとして把えることが可能であると考えられる。つまり、語句と語句の置き換えから、広くモラルの水準にまで我々は両者の関係について思考をめぐらすことができるであろう。以下に、同化したホメーロスの作品を、彼がどのような形でラテン語で表現したか、実際の文例を見ていくことにしよう。

辛い乏しい生活をむしろ進んで耐えるよう、苛烈な軍務で鍛えられた若者は、よく学ばねばならぬ。またパルティアの猛卒らを、槍恐るべき騎士として、攻め悩まさねばならぬ。／そして野外で、危険に身をさらして生活するがよい。彼（ローマの若武者）を、戦っている王の妃と年頃の姫が敵の（彼女たちの）城壁から眺めつつ、／溜息をつくがよいのだ、なにとぞ戦に不慣れな王家の許嫁（眼下で王と共に戦闘中）が、触るにも恐ろしい獅子、血まみれの怒りによって殺戮の真只中へと飛びこむ獅子を嗟さぬように、とおののいて。  
(C. 3, 2, 1-12)

これは戦闘の場でローマ戦士が発揮すべき徳、武勇 (virtus) を称揚し、青年たちに勧奨することを主題とする詩の最初の3スタンザである。この主題のために調子は極めて叙事詩的であり、その格調と緊張感が最後まで保たれている。問題は、城壁下に広がる野で敵軍（ローマ軍）と戦う王と若者 (rudis agminum sponsus) の姿を、恐れおののきつつ城壁から眺めている王妃と姫、という情景である。言うまでもなくこれはホメーロスのいわゆる「城壁からの眺め」(τεειχοσκοπία)<sup>16)</sup> であり、アンドロマケーもヘク

16) K-H, ad loc. Viktor Pöschl は、*Il.* の「城壁から

トールも登場せず、アカイア方の猛将に代ってローマの若い騎士が女性らに恐れられているが、ここですぐ読者の脳裡にひらめくのは、わが子ヘクトールの最期を知って嘆くヘカペーの声を聞いたアンドロマケーが、それと勤づいて城壁へ急ぎ、今や骸となり果ててアキレウスの戦車で曳きづられて行く夫ヘクトールの姿を眼下に見る悲痛な場面である<sup>17)</sup>。血に飢えたライオンという叙事詩的直喩 (leonem, quem cruenta/per medias rapit ira caedes. 11-12) もホメーロスが得意とするものであり、負傷したのちパラス・アテーナーに鼓舞されて再びトロヤ方と闘うディオメーデース (*Ilias*, 5, 135 以下) や、アイネイアースと対決するべく突進するアキレウスらがこれに擬せられている (*Il.* 20, 164 以下)。上述の通りこの作品の主眼はローマの若者たちに、困難に耐えること及び、戦場での雄々しさを勧めることである。この男らしさ (virtus) は、「祖国のために死ぬのは快く、美しい」(13) というよく知られた格言的表現<sup>18)</sup> に凝縮されるが、次にこれは直ちにローマの政治的状况に敷衍される (第5スタンザ)。ホラーティウスはここで「男らしさは、落選の恥辱を知らず、けがれない名誉に輝く」<sup>19)</sup> (17-8) と言っているが、戦場での *virtus* と政治の場で発揮される *virtus* との観念連合は極めてローマ的な、現実的なものである。第3スタンザでライオンになぞらえられた若い騎士もアキレウスではなく、ローマ人である。こうして見ると、抒情詩の中で、ローマの事柄を語るために、

の眺め」がなければ Hor. はこの戦闘図を決してこういう風には造形しなかったことは明らかであると断定する (*Horazische Lyrik*, 1970, 88).

17) *Il.* 22, 460 以下。他に、トロヤの城壁に上ってヘレネーが老王プリアモスにアカイア方の誰彼を説明する場面も挙げられる (*Il.* 3, 141 以下)。Plessis-Lejay (1921<sup>9)</sup>, Orelli (1851), ad loc.

18) テュルタイオスの *Τεθνάμεναι γὰρ καλὸν ἐνὶ προμάχοισι πεσόντα* " *Ἄνδρ' ἀγαθὸν περὶ ἧ πατρίδι μαρναμένου* (勇者にとって、第一線で戦って祖国のために死ぬのは素晴らしいことである) という句をラテン語に移し、さらに *dulce* の一語を加えたものと指摘される (Villeneuve, 1929<sup>7</sup>, Plessis-Lejay, Kiessling-Heinze, ad loc.).

19) *virtus repulsae nescia sordidae/intaminatis fulget honoribus.*

実に手際よくホメーロスの要素が取り込まれていることが明らかになる。現実的なテーマと、この細部の要素がうまく融け合って、いささかの破綻も見せない。

ホラーティウスは、ある別種のモチーフを選びながら、ホメーロスに描かれた状況を彷彿せしめることがある。たとえば、*Sat.* 2, 6 では、都会生活と田園生活の相違をあげ、彼の好みである田園生活を称賛するための1エピソードとして、よく知られた町ネズミと田舎ネズミの道中のくだりがある。

iamque tenebat  
nox medium caeli spatium, cum ponit  
uterque  
in locuplete domo vestigia,

そして既に夜は天空の中央に達していたが、その時分に両者は、とある富裕者の館へと踏み込む。*(Sat.* 2, 6, 100-2)

ネズミの行動を語るには荘重すぎるラテン語の格調が注意を惹く。これは「アエネーイス」の一節を読んでいるような錯覚を与えずにはおかない。この寓話の原型はもちろんアイソポスが伝えるものであり、ホメーロスの世界からはほど遠い。ホラーティウスはこの原型をさらにふくらませている<sup>20)</sup>。しかしこの状況の背後に、ディオメーデースとオデュッセウスの英雄的遠征 (*Il.* 10, 272 以下) が浮かび出ると Commager は指摘する。英雄たちと二匹のネズミとの結合は一見して突拍子もないが、ここで発揮されている格調の高さが「我々に、親しまれた寓話と、哲学的かつ叙事詩的雄大さとを比較考量せしめる」<sup>21)</sup> のである。同時に、この叙事詩的壮大さにホラーティウス一流の諧謔が巧みに表現されていることは否めない。Kiessling-Heinze はここの描写のふざけた感じ (etwas Schalkhaftes) を指摘している<sup>22)</sup>。いずれ

にしる当時の読者は両方の話を知っていたわけであるから、特に詩人が注釈を加えずとも直ちに了解し、二重の楽しさを味わったはずである。寓話と叙事詩という二つの領域の繋りに読者が気付くこと、ここにホラーティウスが狙いとしたこの部分の効果がある。

詩人はしばしば伝承と事実とを対応させて一つの主題を述べるが、叙述のいわば原点は彼自身の実際的経験である。*Sat.* 1, 9 で詩人は、出世の手蔓を求め自分をマエケーナースに売り込もうと焦っている、うるさい男に掴まった時の模様を語っている。状況は喜劇的である。話そのものにしても、ホラーティウスの日常生活の一端を伝えるもので大変面白いが、そういう場合でも彼は高雅な模範を利用できるなら利用することを忘れない。

ある日、いつものように詩のこと<sup>23)</sup>を考えながら聖道<sup>サクラ・ウィア</sup>を散歩していた詩人は、この男に出会い、しつこく付き纏われる。途中、詩人仲間、しかもこの男のことをよく知っているアリストティウス・フスクスが現われる。しかしこの友人は、にこにこ挨拶を交しながら、またホラーティウスの送る数々の合図の意味を知りながら、意地悪く逃げ去る。また二人だけになって詩人が絶望していると、思いがけぬ救いの手が

23) *nescio quid meditans nugarum* (2) の *nugarum* が何を指すのか、Orelli はこれを検討することの意義を否定し、詩のこととも言えるし、また、さして真面目なものではないあらゆる種類の考えごと、とすることも可能であるとした。確かにサクラ・ウィアの雑踏、騒音は詩想を練ったり、詩句を考案したりするには不向きであろう。しかし、いつも——というのは Hor. はここで「いつものように」(*sicut meus est mos*, 1) と言っているので——詩人が漠然とつまらぬ考えごと (*omnis generis cogitationes haud nimis serias*, Orelli, ad loc.) にふけていたとするのはむしろ不自然である。従って我々は Kiessling-Heinze, E. P. Morris (*Horace, Satires and Epistles*, 1939, paperb. 1974), T. E. Page (1964, 1883<sup>3)</sup>) らと共にこれを「詩」のことと解釈したい。尤もこれは古くから Porphyrio が *Sic verecunde poetae nugas et lusus solent appellare versiculos suos* と指摘していることである (Pomponii Porphyrii, *Commentum in Horatium Flac cum*, recensuit Alfred Holder, 1967, Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Innsbruck 1894, 275). 「つまらぬ考えごと」とするのは Villeneuve (ad loc.), Nial Rudd (*The Satires of Horace*, 1966, 77).

20) Cf. Kiessling-Heinze, ad loc.

21) Commager, 121-2.

22) Orelli (ad loc.) はこの引用箇所を *parodia epica* と断言している。

現われ、くだんの男は法廷に引っ張られていく。そこで思わずホラーティウスは 'sic me servavit Apollo' (こうしてアポローンが私を救って下さった, 78) と呟くのである。軽快でユーモラスな運びの詩を、神の名を持ち出して締めくくるこの一文は、ホメーロスの τὸν δ' ἐξήραξεν Ἀπόλλων (だがアポローンが彼 (ヘクトール) を救い出した) を借りたものである<sup>24)</sup>。アキレウスの手からヘクトールを救ったアポローンのように、この迷惑男の訴訟の相手方が詩人を窮地から脱せしめたとの意である。この一文には二重の効果がある。絶えず読者を微笑させてきて、最後にこれまでとは対象的に雄壮な叙事詩の一句を借りることによって、そのおかしみを増幅させる。短文で歯切れがいい。と同時に、「詩のことを考えながら」で始まるこの詩の劈頭と、この最後部とを巧みに繋ぎ合わせている。というのは、アポローンは別けても詩神であり、詩人の守護神だからである。

この作品にはもう一つ叙事詩の世界を想起させる所がある。この部分での詩人と疫病神とのやりとりは次のような調子である。

ここがこいつの言葉を中断する潮時だった。  
「あなたには、健康なあなたを必要とする母御や御親戚がありますか」——「1人もいやしません。みんな葬ってやりましたもの」——  
「幸運な人たちだ。今や残っているのはこの私だけなのだ (felices. nunc ego resto)」。 (Sat. 1, 9, 26-8)

最後の言葉は詩人の傍白である。既に死んで、このうるさい男に煩わされずに済む人々の方が自分より幸福である、との意であるが、この 'felices!' という悲鳴は、嵐に襲われて最期を覚悟したオデュッセウスの愁嘆場に通じる<sup>25)</sup>。

24) *Il.* 20, 443. Orelli, Kiessling-Heinze, Plessis-Lejay, ad loc. Porphyrio, 279. Commager, 128. Rudd, 79. なお, *Il.* 20, 443-4 は, *C.* 2, 7 で Hor. がメルクリウス神による救助を語る文章 (後出) とも対応する。

25) Rudd, 78 (この作品に現われる叙事詩的要素を 78-9 で指摘している)。

三倍も、いや四倍も仕合せだ、とっくにトロヤの広野で世を去ったあのダナオイたちは。 (*Od.* 5, 306-7)<sup>26)</sup>

またウェルギリウスのアエネーアースも、風神アエオルスを起こした嵐に翻弄され、天に手を差し伸べて呻いている。

ああ、三倍も四倍も幸福だ、たまたまトロヤの高い城壁の下で、親たちに見守られながらみまかった人々は! (*Aen.* 1, 94-6)<sup>27)</sup>

このような符合は決して偶然の所産ではなく、ホラーティウスは英雄の劇的な場面を念頭に置いて自分の詩句を作り、楽しんでいるのであり、これが、上述の場合と同様に、喜劇と悲壯を背中合わせにした効果を上げている。

「神による救助」のモチーフ、及び彼自身の体験に基づく記述という点で、直ちに我々の脳裡に浮かぶいま一つの箇所は、詩人がピリッピイの戦場で楯を捨てたと語るくだりである (*C.* 2, 7)。ホラーティウスが、酸鼻をきわめたピリッピイの戦野<sup>28)</sup>をどういうふうにして後にしたのか、具体的な詳細は明らかでなく、その間の事情はさりげなく表明されるにすぎないが、ともかく彼はこの戦争に生き残った。しかし一流のレトリックで、その際彼を救ったのはメルクリウス神であった、と語る。

sed me per hostis Mercurius celer  
denso paventem sustulit aere,

しかし敏捷なメルクリウスが、敵に囲まれて青ざめていた私を、厚い靄に包んで救って下さった。 (*C.* 2, 7, 13-4)。

26) τρισμάκαρες Δαναοὶ καὶ τετράκις, οἳ τότε ἔλοντο Τροίην ἐν εὐρείῃ... (*Od.* 5, 306-7)。

27) *O terque quaterque beati, / quis ante ora patrum Troiae sub moenibus altis / contigit oppetere!*

28) ピリッピイはマケドニアの町。ここで42年、アントーニウスとオクターウィアースの連合軍が、カエサルを暗殺したブルートゥスやカッシウスの率いる軍隊と対決してこれを破り、いわゆる共和制派を潰滅させた。

引用箇所直前のスタンザで描かれている詩人の自画像は、いささかも英雄的ではない。しかしここで、「私」を一英雄に置き換えると、ぴったり対応する場面がホメロスにある。

τὸν δ' ἐξήραξ' Ἀφροδίτη  
 ..... ἐκάλυψε δ' ἄρ' ἤερι πολλῇ,  
 しかし彼(アレクサンドロス=パリス)をア  
 プロディーテーが奪い取り、厚い霧で包んだ。  
 (II. 3, 380-1)

アプロディーテーは、メネラーオスに取り押えられたパリスを、あわやのところで霧に包んで助け出す。神が英雄を霧(または雲)に包んで援助し、あるいは救出するのはホメロスのモチーフの一つであり、ウェルギリウスにもその例が見られる<sup>29)</sup>。この部分でのホラーティウスとホメロスの対応は諸家の指摘するところである<sup>30)</sup>。

先にあげたネズミの道中の場合と同様に、登場人物は非英雄的であるが、ここでは戦野からの逃走という叙事詩にうってつけの状況に合わせて、ホラーティウスはホメロスの詩句をラテン語に移し、自分のかつての行動を神意に託してさりげなく語ったものであろう。確かにこのスタンザの主たる効果は、読者がホメロスの一節を想起することにあるかも知れない<sup>31)</sup>。アプロディーテーによるパリス救助(II. 3, 380-

29) *Aen.* 1, 411, *At Venus obscuro gradientes aere saepsit* (しかしウェヌスが、歩む者たちを黒い霧で包んだ)。

30) Orelli (denso aere=ἤερι πολλῇ), Kiessling-Heinze (II. 20, 443), Page (denso aere=ἤερι πολλῇ, II. 3, 380), Plessis-Lejay (II. 3, 381; 20, 444), Fraenkel (Eduard, *Horace*, 1957, 164. II. 20, 443 f.), Commager (128. II. 3, 380 ff.). Hildebrecht Hommel (*Horaz: der Mensch und das Werk*, 1950, 126. II. 20, 443 ff.).

II. 20, 443-4 : ...τὸν δ' ἐξήραξεν Ἀπόλλων, ...ἐκάλυψε δ' ἄρ' ἤερι πολλῇ (彼(ヘクトール)をアポローンが奪い取り、...厚い霧で包んだ)。

Doris Ableitinger-Grünberger は、詩人を救う神がメルクリウスであることは単なる偶然ではありえないと言うが、ここでの詩人と神との関係を特に述べていない (*Der junge Horaz und die Politik: Studien zur 7. und 16. Epode*, 1971, 98)。

31) 特に Fraenkel, 164.

1), アポローンによるヘクトール救助 (II. 20, 443-4) などである。青ざめているホラーティウスの姿と、パリスの優雅な逃げっぷりの対比が指摘される<sup>32)</sup>。あるいは、Fraenkel は、ホラーティウスがピリッパイでの出来事を語るために英雄的な話素を用いる場合、詩人は 'playful spirit' をもってそうしているのであり、ここでのメルクリウス神の役割もこの線で解すべきであると主張している<sup>33)</sup>。

しかしこのスタンザの狙いは、この対比と 'playful spirit' に尽きるのであろうか。筆者には、ホラーティウスがここで見せている「さりげなさ」は、実は詩人が表現を求めて大いに苦心した結果ではないかと思われる。ここで想起しなくてはならぬのは、ピリッパイでホラーティウスが軍団将校として対した敵軍の一人が他ならぬアウグストゥス(戦争当時はオクターウィアーヌス)であったという事実である。この作品を含むカルミナ 1-3 巻が出版されたのは前23年で、この時期から見て42年の戦争はなるほど旧聞に属する。しかし旧聞として見過すには余りにも巨量のエネルギーを費消し、また歴史的決定性の極めて大きな戦争であったことは周知の通りである。当時から20年弱経過した今、ホラーティウスは立場を変えて、かつての敵将アウグストゥスの身近な所で生きている。勝てば官軍で、勝者は赦す権利を握る。だから優越のみを持つ勝者の側に問題はない。他方、赦される者は専ら惨めである。敗残の後に赦されて相手の体制下に入る者の心理は、おのずと複雑たらざるをえまい。従ってホラーティウスがピリッパイを云々する場合に何らかの痛みを感じなかったとは考えられない。ひいてはこれが詩人の頑な公生活忌避、政治嫌いを助長したのではないだろうか。

古註家 Porphyrio は、「ホラーティウスは、その殺戮の場からメルクリウスによって救い出されたと軽く言っているが、これは、密かに (clam), まるで何か法に触れる行為をする時の

32) Commager, 128-9.

33) *Op. cit.* 164-5.

ようにこそそと (quasi furto quodam) その場から逃亡したということである」と釈義している<sup>34)</sup>。後年ホラーティウスがこのような暗さをもはや背負ってはいなかったと断言できるであろうか。作中でピリッピイの体験を語る場合に、このような暗さを、苦汗を克服するための苦心がこの「さりげなさ」——軽やかさは確かに彼の魅力的な身上の一つではあるが——をもたらしたものと考えられるのである。故にこのスタンザの含みは、決して‘playful spirit’のレベルで留まってはいないと筆者は考える。ついでながら Fraenkel は、この作品では、メルクリウスをホラーティウスの特別な保護神とする理論を裏打ちするものは見出せないと断言する<sup>35)</sup>が、この点に関しては別の機会に考察する必要があろう。

様々なモチーフや表現の対応をもって、ホラーティウスを単なる模倣者とするのは当を得ない批評である。これまでに見たように、彼がホメーロスのものを取り入れる場合、そこに無意味な動きはない。ホメーロス、アルキロコスその他のギリシア詩人たちの表現や韻律を自分のものにしたが、自ら「私は他人の足跡は踏まなかった」と公言している<sup>36)</sup>ように、「従順な羊群の如き模倣者たち」<sup>37)</sup>とは一線を画し、彼らを手厳しく評する。ギリシアの詩人たちに学び、自分なりの成長を遂げつつ彼らに従うが、しかし決して模倣者ではない<sup>38)</sup>、との意識を高く持っている。我々がホラーティウスとホメーロスの関係を見る場合にももちろん、彼自身のこの主張を見過してはならない。

Ableitinger-Grünberger はその *Epd.* 16 考察の中で、両詩人のモチーフによる対応例を幾つかあげている<sup>39)</sup>。もちろんホメーロス以外にもヘーシオドスやアリストパネースその他のギ

リシア作家らが論じられているが、我々の主題に関連する点で興味深い指摘がなされている。それは、ホラーティウスがホメーロスに倣って新語を造り出した可能性があるということである。

ἀλλὰ τὰ γ' ἄσπαρτα καὶ ἀνήροτα πάντα φύονται,

πυροὶ καὶ κριθαὶ ἡδ' ἄμπελοι …

しかし、種まきもせず、耕もししないで、すべての物が生長する、小麦や大麦、そして葡萄樹が……(*Od.* 9, 109-110)<sup>40)</sup>

divites et insulas,

reddit ubi cererem tellus inarata quotannis et inputata floret usque vinea,

至福者たちの島々〔へ行こう〕、そこでは、耕されない土地が年毎に収穫を〔人間に〕返し、枝を下ろされたことのない葡萄樹にいつも花が咲いている。(Epd. 16, 42-4)

前者はキュクロープスたちの国を描写し、後者は至福者たちの島々の光景<sup>41)</sup>を述べているが、*Od.* の109行で使われた形容詞 ἀνήροτος (耕されない) と ἄσπαρτος (種がまかれぬ) は共にホメーロスにしかない語で、他方、ἀνήροτος に対応するホラーティウスの inaratus (耕されない) は、inputatus (枝下ろしされたことのない) と共にホラーティウス以前のラテン語には用例が見当らず、恐らくホラーティウスはホメーロスに倣ってこの2語を創作したもの、というのが Abl.-Grünberger の論である<sup>42)</sup>。もしこの推測が正しければ、彼は‘imitator’どころではなく、自己の創造力を証示しており、同時に我々は彼の「自分は模倣者ではない」との自己評価を肯首できると言ってよい。そして Abl.-Grünberger のこの見解は、ホラーティウス自身が *A. P.* 46-72 で語っている造語に関

34) *Iucunde autem a Mercurio se sublatum de illa caede dicit, significans clam et quasi furto quodam se inde fugit* (64).

35) *Op. cit.* 165.

36) *non aliena meo pressi pede* (*Epst.* 1, 19, 22).

37) *imitatores, servom pecus* (*Epst.* 1, 19, 19).

38) Cf. Wili, 333.

39) *Op. cit.* 70 ff.

40) 但しこの2行は版本によって削除されることがある。ἀνήροτος, ἄσπαρτος の両語は123行にも出てくる。

41) ヘーシオドスとの関係について Abl.-Grünberger は 70-71 で述べている。

42) *Ib.* 70.

する考察に照らして、正しいものであると思われる。ここで彼は、必要があれば、新語を「ギリシアの源泉から経済的に (parce)<sup>43)</sup>導く」ことは構わないと述べているからである<sup>44)</sup>。さらにホラーティウスは言語を支配するのは慣習 (usus, A. P. 71) であり、木々の葉が落ちて再び芽生えると同様に、言語も時の進むままに装いを変えるものであると説く (A. P. 60-62)。周知の如く、木々の葉云々の淵源は、II. 6, 145 以下で、グラウコスがディオメデースを面前にしてふるう長口舌の最初の部分である。ホメーロスは木々の葉の生まれ変りに、人間の世代交替を擬えているが、ホラーティウスはさらにここで巧みに言語の変遷という問題をも並べて見せた<sup>45)</sup>。これは我々の目下のテーマからは遠すぎる問題であるが、遠いにもかかわらずまたしてもホメーロスであり、ホラーティウスにおけるホメーロスの存在がいかに大きく根深いものであるかを認識させられるのである。

## ※

ホメーロスのようなものが様々な形でホラーティウスの作品に入り込んでいる例を見てきた。そして、どのような場合でも、ホラーティウスの側では無意味な借用はしていないこと、個人的な、また、ローマ詩人としての内的要請に起因する操作があること、そしてホラーティウスのラテン語の中に異和感なく溶けこんでいるこの要素が彼自身の独創性として変容していること、を指摘できたと筆者は考える。さらに様々な対応を列挙することは、ギリシアの大詩人の言葉をラテン語で再読するという愉しみを伴うものであるが、しかし、本章におけるこの作業の意義は終わった。これまではいわば作品と作品の対

43) Wili による (319)。

44) *et nova fictaque nuper habebunt verba fidem, si/Graeco fonte cadent parce detorta* (A. P. 52-3)。

45) II. 6, 146: *οἷη περ φύλλων γενεή, τοιγὰ καὶ ἀνδρῶν* (木々の葉に生まれ代りがあるように、人間にもそれはある)。Orelli, Kiessling-Heinze, Page, Villeneuve, ad loc. Becker, 151. なおルクレティウスの先例も指摘されている (Kiessling-Heinze, ad loc. Commager, 259. *Pierre Grimal, Essai sur l'Art poétique d'Horace*, 1968, 92)。

応で、ホメーロスがホラーティウスの全作品を通じてどのような痕跡を残しているか——一部にすぎないが——を観察し、そして、I で述べたように、叙事詩を避けたにもかかわらず、叙事詩的要素がホラーティウスにおいて相当の役割を果たしていることを再確認する結果になった。次に、ホメーロスに関するホラーティウスの発言、ホメーロス観を、いわば直接証言という形で見ていくことにしよう。

ここではホラーティウスの視点を詩人としてのものと、社会で生を営む人間一般としてのものとに分けて考えることができる。

まず詩人として見たホメーロスは、既に述べた如く、詩人の王である。

いや、たとえマイオニアのホメーロスが第一の座を占めてはいても、ピンダロスの、ケオース島の [詩人の]<sup>46)</sup>、またアルカイオスの<sup>カメーナーエ</sup> 声音も恐ろしい詩女神たちや、ステーシコロスの重々しい詩女神たちが隠れているわけではないし、

またかつてアナクレオンが楽しんだものを時が消し去ったわけでもない。愛は今なお呼吸し、そして、アイオリスの乙女<sup>47)</sup>の琴に託された熱気も生きているのだ。(C. 4, 9, 5-12)

直前で抒情詩人としての自己の業績を誇ったあと、ここでホメーロス以下のギリシア詩人たちを列挙している。これによってホラーティウスがどのような模範を選んでいたか知ることができる。模範に関して言えば彼はローマの先達を回避し、ギリシアの詩の「祖先」たちしか念頭に置かない<sup>48)</sup>。C. 1-3 巻で実証したところである。彼自身の初期抒情作品との関連で彼が直接の模範とし、詩作法上の支柱としたのはもちろんホメーロス以外の詩人たちであることは言うまでもないが、このような関係を度外視して、やはり詩人の中の最大の詩人はホメーロスであ

46) 抒情詩人シモーニデースのこと。

47) 小アジアのアイオリス地方に近いレスボス島の女流詩人サッポーのこと。

48) Wili, 76。



ると表明する。*priores sedes* の *priores* が「歴史的に最初の」という意味だけではないことは明白である。この二つのスタンザで詩人が強調しているのは、抒情詩人もホメーロスに負けず劣らず不滅の作品を遺すことができるということである。ところが、その直後に、例として引合いに出されるのはほとんどすべてホメーロスの作品によって不滅になった人物たちである。トロヤの王子パリスに誘惑されたスパルタ王妃ヘレネー (16)、クレータの弓を絞るテウクロス<sup>49)</sup> (17)、滅亡したトロヤ (*Ilios*, 18)、この戦争で戦ったイードメネウスやステネロス<sup>50)</sup> (20)、妻子のために奮戦したヘクトールやデーイポボス<sup>51)</sup> (22)。そしてアガ멤ノン以前にも勇士は数々いたが、彼らはすべて、歌ってくれる神的な詩人 (*vate sacro*, 28) がいなかったために、涙されることなく、世に知られることもなく、久遠の闇の不遇をかこつのである、とホラーティウスは付言している。詩人は以上のような人物たちや都市 (トロヤ) を、それ以前にも同様な運命を見た人物や都市があったのだ、と語るために列挙している。いわば ‘negative exempla’<sup>52)</sup> である。30行からあと詩人はロツリウスに、「私が歌ってあげるから、君の名は後世に伝わる。泣かせはしないぞ」と激励の言葉をかける。その伏線として、以上の人物たちが不滅の名声を得た例として四スタンザの中で (13-28) 語られている。ここには、神話や歴史

上の英雄、女性たちは、専ら詩人の力によって長命するのだ、との確固としたホラーティウスの信念が読み取れる<sup>53)</sup>。この信念はローマ社会での自分の詩的経歴、諸種の経験、そして特に上記の如くギリシアの文学的先例に親しんで結果したものである。この信念をもって彼は敢えて、自分がホメーロス以下の詩人たちと同じ役割を果たすのであり、そして自分の名をもってロツリウスに不滅を確約するとのことを表白する。しかし、上に言及した四スタンザの表現は余りにホメーロスの詩的である。彼は、ホメーロスに劣らず抒情詩人たちにも功があるとこの詩を歌い始め、その詩人たちの名をあげた。この功の例証は、しかし主としてホメーロスがその叙事詩に登場させた人物群であり、最後の例になっているアガ멤ノンが *vates sacer* によって不滅にされたというくだりで、この *vates sacer* とホメーロスとを重ね合わせて想念しない者はいないであろう。この地点で読者は先に出たピンドロスやサッポーのことは忘れてしまっていると云っても過言ではあるまい。賛歌が様々な形式を取りうることを、別けても叙事詩はその動性によって人物のイメージを定着させやすいことは言うまでもないが、それにしてもここでホラーティウスは抒情詩を称えながら叙事詩的素材の方へ、ホメーロスの世界へ引きずられていく。そして彼のこの動きにはいかなる抵抗もぎごちなさも見られない。

A. P. は詩人が晩年にさしかかった頃に作制された<sup>54)</sup>。この作品でもホメーロスの存在は誠に顕著である。ここで A. P. 解釈に立ち入ることはできないが、「詩論」だからホメーロスが陰に陽に語られて当然であると単純に言うことはもちろんできない。

ホメーロスは叙事詩の正しい書き方を教えた。

*res gestae regumque ducumque et tristia bella*

53) Wili, 362, 168.

54) A. P. の成立年代については論が多いが、P. Grimal はこれを前15年頃としている (*Essai*, 27).

49) アカイア方面では最高の弓の使い手 (*Il.* 13, 313-4 : *Τεῦκρός θ', ὃς ἄριστος Ἀχαιῶν/τοξοσόονη*).

50) イードメネウスはクレータ王で、ミーノースの孫 (*Il.* 13, 361 以下)。ステネロスはカパネウスの子で、ディオメデースの従者 (*Il.* 5, 106 以下)。

51) 柱と頼む夫ヘクトールを失ったアンドロマケーの悲嘆が *Il.* の最後に見られる。…*ἔχες θ' ἀλόχους κεδνάς καὶ νήπια τέκνα* (*Il.* 24, 730, 愛しい妻たちや、まだ幼い子供たちをあなたは守って下さった)。デーイポボスはプリアモス王の子の一人で、パリスが殞れたあとヘレネーを妻に迎えるが、確かにここでは Kiessling-Heinze が指摘するように、詩人はこの妻が *adultera Helene* と同一人物であることを忘れてるように見える。しかし *coniugibus puerisque* (24) の複数にはヘクトールとデーイポボスだけの妻ではなく、「トロヤ全体の妻子のために」と解すべきであろう (Cf. Plessis-Lejay, ad loc.).

52) Commager, 321.

quo scribi possent numero, monstravit  
Homerus;

王たちや将軍たちの勲功とか、悲惨な戦争が、  
どのような韻律で書かれうるかを、ホメーロ  
スが示した。(A. P. 73-4)

ホラーティウスによると、人類の生活が野蛮の  
状態にあった時代、最初に出現した詩人はオル  
ペウスである。彼は、神々の言葉を解する神的  
な人物 (sacer interpresque deorum, A. P.  
391) で、人類に人間としての生き方を教えた。  
次は、テーバイの城市を建てたアンピーオーン  
(Amphion, Thebanae conditor urbis, A. P.  
394) で、これは琴の音で岩石を動かし、美し  
い声で思うままに導くことができた。そして彼  
らのあとでホメーロスが類のない光彩を放っ  
た<sup>55)</sup>……。詩人がオルペウスやアンピーオーン  
を実在したと考えたかどうか判らないが、この  
二人をホメーロスより古い時代の詩人である  
としており、特に両者の知的、倫理的側面を強調  
している。これは文化英雄の一つの型である神  
話的開祖に不可欠な属性である。今日の視点か  
らすればこの二人は神話的形象であって、実在  
した詩人としてはやはりホメーロスが第一であ  
ることに変わりはない。ここでホメーロスの次に  
テュルタイオスの名が見られるのは、唐突の感  
がある<sup>56)</sup>。

A. P. は主として劇詩の詩作法を論じた作品  
で、舞台が主であり、叙事詩は付随的に、それ  
もあくまでも舞台のことを明らかにするために、  
語られている<sup>57)</sup>。Pierre Grimal 教授は、ア  
リストテレースの発言を引いて、この作品にお  
けるホラーティウスの立場を定義し、併せて悲  
劇と叙事詩の関係を明らかにする。すなわち、  
悲劇は叙事詩の一特殊形であるから、悲劇研究  
のためにはまず、その上位者たる叙事詩研究を  
もって開始し、然る後に、悲劇の特殊性を検討

しなくてはならない。かくして叙事詩は、詩の  
「最高位の」形式、最も包括的な形式であり、  
他の形式はすべて叙事詩の種 (espèce) にすぎ  
ないと見做されうる。ホラーティウスも、いわ  
ば、純粹状態の叙事詩の中に、詩的創造固有の  
美の諸則を発見し、然る後にこれらの規則を、  
彼の論述の対象である演劇的な美の中へ投影す  
るであろう<sup>58)</sup>、という。

だから、本来劇詩を扱いながら、ホラーティ  
ウスが A. P. で叙事詩から諸例を借りて説明し  
ている理由は明らかである。その叙事詩は主と  
して必然的にホメーロスの作品である。アリス  
トテレースもピロデーモスも、詩的美学の諸則  
を立てようとする時は、日常的にホメーロスに  
関説し、ヘレニズム期の批評家たちにあっても  
体系的なホメーロス関説は習慣となっていた。  
従ってホラーティウスが同じ問題を論じるに当  
って、技術論的に彼らと軌を一にしても何ら不  
思議はない。かくしてホメーロスの与える例は、  
叙事詩そのものを論究するために取り入れられ  
るのではなくて、一般的に詩法上の「美」の定  
めを立て、そして、劇詩にこの美を適用するに  
際しての諸則を設けるためのものであると考え  
られる<sup>59)</sup>。

ところが、悲劇が主役で、叙事詩は脇役であ  
るはずのこの作品中に、悲劇論というテーマか  
らすればまるで場違いとも言える箇所がある。  
しかもそれは真摯熱烈なホメーロス賛になっ  
ている<sup>60)</sup>。この部分を要約すると次のようになる  
(A. P. 128-152)。一般的な性格を個人に当て  
はめて語るのは困難であるから、トロヤ伝説  
圏<sup>61)</sup>の中から主題を選ぶ方がよい。そして叙述  
を開始するに当っては、叙事詩圏詩人 (scriptor  
cyclicus, 136) のように「大山鳴動鼠一匹」<sup>62)</sup>

58) *Id., ib.,* 38.

59) *Id., ib.,* 156-7.

60) Grimal, *ib.,* 151. Wili, 321.

61) *Iliacum carmen* (129) の解釈については Grimal,  
*ib.,* 146-8 を見よ。

62) *parturient montes, nascetur ridiculus mus* (A. P.  
139). ここでなされる叙事詩圏詩人の始め方に対する非  
難 (136-9) は、恥ずべき結果しかもたらさない大げさ  
な企てを最初に公言する詩人に対する冒頭部での批判

55) *insignis* の解釈は Kiessling-Heinze, Villeneuve,  
Page らに拠った。

56) これは戦争に関係する詩を作った詩人という関係から  
であろう (Kiessling-Heinze, ad loc.).

57) P. Grimal, *Essai,* 37-8.

式であってはずならず、やはりホメーロスが *Od.* 冒頭で示したような方法でなければならぬ<sup>63)</sup>。語らないことを前約束したり、物語を散漫なものにしたりするのはよくない。このホメーロス賛は次の如く締めくくられている。

彼（ホメーロス）は、ディオメーデースの帰還をメレアグロスの死から、またトロヤ戦争を〔レーダーの〕二個の卵から説き起しはしない。常に彼は大団円へと急ぎ、周知された諸々の事件のただ中を通して聞き手を引っ張っていき、そして手がけても見事に作品化できないと思うものは捨て、創り出したり、真実に虚偽をないまぜたりして、中間（medium）が冒頭（primo）と、末尾（imum）が中間と食い違わぬようにする。（*A. P.* 146-152）

叙事詩圏詩人とは、「小イーリアス」や「キュプリア」などを編んだ詩人たちを指すのであろう。彼らは、「プリアモスの運命と、名高い戦争のことを歌うであろう」（*fortunam Priami cantabo et nobile bellum*, 137）という具合に、最初に把えどころのない目標を設定する愚を犯した。というのは、たとえば「プリアモスの運命」なら、この約束から結果するのは一箇の集中的な物語ではなく、主人公プリアモスの生から死に至るまでの伝記にすぎないはずだからである。ホメーロスは、彼らとは違って<sup>64)</sup>、「アキレウスの怒り」をテーマにして *Il.* を、「オデュッセウスの帰還」という一事を縦糸にして *Od.* を語り、物語としての筋を一貫させ、諸事件を手際よく排列して、読者（聴者）を最後まで

で倦ませなかった。この部分（128-152）が前後の舞台論とはうまくつながらず印象は否めないが、やはり、悲劇の詩作法のために、英雄詩の作法を述べているものと考えらるべきであろう。いずれにしろ、ホラーティウスはここでホメーロスの功績を要領よく指摘し、賛えているのである。

同じ *A. P.* の中でホラーティウスは一度だけこの大叙事詩人を難じている、と思わせるようなくだりがある。上に見たようにホメーロスは専ら称賛の的となっているので、この場所はいささか目立つ。粗悪な作品を献じてアレクサンドロス大王の歓心を買ったコイリロスのことは前章で簡単に触れたが、ここでホメーロスがこのコイリロスと並んで言及される。

同様にひどく運びの遅い者は、私にとってはあのコイリロスと同じである。彼の場合、二、三度良い点を見つければ私は笑いながら感心する。ところが素晴らしい（bonus）ホメーロスが転寝するようなことがあると、私は残念に思う。もっとも、その作品の長さゆえに、〔彼は〕一度はまどろむ権利があるけれど。（*A. P.* 357-360）

最後の行で、これはやむを得ないことである（*verum operi longo fas est obrepere somnum*）と条件つきで許容している点を除けば、ここでホラーティウスは、Klingner が言うように、最初から批評の対象にすべからぬコイリロスに対するよりは、その対立像たるホメーロスに対して、より手厳しい<sup>65)</sup>。とはいえこれは、最良の詩人であるがゆえに許容しうる、やむを得ない細やかな瑕疵の指摘であり、これまでに繰り返し述べてきた根本的なホメーロス称賛にはいささかも関りはない。

∨（14以下）に通じる（Friedrich Klingner, *Studien zur griechischen und römischen Literatur*, 1964, 371）。

63) ここで、既に引用した *Od.* 冒頭のラテン語訳がなされている（本文39頁）。もちろんこれは 価値ある詩はいかに開始すべきであるかを示すための手本としてである（Cf. Becker, 83）。

64) Becker, 83. Klingner は特に *Hom.* における芸術的経済性 *künstlerische Ökonomie* を強調し、叙事詩圏詩人にはこれがなかったという（371）。

65) Klingner, 387. Klingner はこの行の思考は前行のそれを緊密に継続するものではなく、ここでついでに表明されたものであるとする（*ib.*, n. 1）。Hommel は、この非難は Lucilius やギリシア人たちの用いたトポスであると指摘している（*Eigenamenverzeichnis und Glossar zu Q. Horatius Flaccus*, 1950, 57-8. 他に Kiessling-Heinze, Page, ad loc.）。

さて、ホメーロスは叙事詩技法のあらゆる点で範を垂れた詩人としてだけ偉大であると見做されるのではない。ホラーティウスが後期作品で、ストアのホメーロス評価を容れていることはよく指摘されることである<sup>66)</sup>。それは特に書簡詩第1巻第2篇から帰結するのであるが、ホラーティウスはここで倫理、道徳のレヴェルにおけるホメーロス把握を明白に述べている。我我はこの作品の一部を、*Od.* 冒頭部分との対応に関連して本章38頁に引用した。今再びこの作品に立ち帰り、その最初の4行に目を向けねばならない。

マクシムス・ロッリウス君、きみがローマで弁論術を学んでいる間に、私はプラエネステでトロヤ戦争の著者〔の作品〕を再読しました。この人は、何が美しく、何が醜いかを、また何が有益で、何がそうでないかを、クリューシッポスやクラントールよりも明確に、上手に語っています。(Epst. 1, 2, 1-4)<sup>67)</sup>

美しくあること *pulchrum* (*καλόν*)、有益なこと *utile* (*συνφέρον*) は、まっとうな人間の義務 (*καθήκον*) を形成する二つの要素である<sup>68)</sup>。これをホメーロスが、名の挙がっている哲学者たち<sup>69)</sup>よりも上手に、かつ分かりやすく<sup>70)</sup>述べているとするホラーティウスは、ここでこの叙事詩人を彼らを凌ぐ哲学者として評価しているも

66) Becker, 38, 及び 83, n. 14. Wili, 294-5.

67) *Troiani belli scriptorem, Maxime Lolli, dum tu declamans Romae, Praeneste relegi; qui, quid sit pulchrum, quid turpe, quid utile, quid non,*

*planius ac melius Chrysippo et Crantore dicit.*

68) Kiessling-Heinze, Orelli, ad loc.

69) クリューシッポスはストア派の、クラントールはアカデメイア派の哲学者。

70) ここは *planius* (Orelli, Page, Kiessling-Heinze, Morris, Klingner, Jean Préaux, *Q. Horatius Flaccus, Epistulae, Liber primus*, <Érasme> 20, 1968) を取るのが一般的であり、筆者もこれに与する (Porphyrio も *manifestum* としている)。 *plenius* の読みは、我々の見た限りでは、Villeneuve と Plessis-Lejay にしかない。 *plenius* は写本による支持が少なく (Préaux), 他方 *clarius* の同義語たる *planius* は (Préaux), 生きいきとした実例をもって教える Hom. に対するほめ言葉である (Préaux, Kiessling-Heinze).

のと言ってよい。ホラーティウスにとってこの叙事詩人は、文学と哲学 (*sapientia*) を力強く結合させた作品によって、人間の取るべき道を教える師である。この師の作品を、ホラーティウスが倫理規範の集大成と見ているとの指摘<sup>71)</sup>は正当であろう。静かなプラエネステに隠れて哲学研究に勤しみつつ、今再びホメーロスを繙いた彼は、この認識を、なぜホメーロスをこう考えるかとの見解をロッリウスに伝えている。パリスの愛に発端するトロヤ戦争譚の素材は、愚かな王たちや人間たちの激情 (*stultorum regum et populorum aestum*, 8) である。アンテーノール、パリス、ネストールらが、それぞれに考え、行動する。愛がアガメムノーンをさいなみ、怒り (*ira*, 13) が彼とアキレウスを共々に突き上げる。そして、

謀反、瞞着、暴悪、情欲、そして憤怒をもって、イーリオンの城壁の内外で悪事が行われる。(Epst. 1, 2, 15-6)

英雄たちは神にも近い力量をもって勇武を發揮するだけではない。人間性が否応なく彼らの心身の半分を占めている。戦争状況ではこの人間の属性が普通以上に露出される。人間固有の欠点があれば彼らは神々と区別できなくなるであろう。従って彼らの犯す罪は、彼らに見られる神性のいわば対重としての意義を有するものと言えよう。ホメーロスを読みながら、ホラーティウスは確かな眼で、トロヤ戦争を惹起した王たちや諸民族の愚かしさ、犯罪性を洞徹する。アガメムノーンにしる、アキレウスにしる、並びない戦士であると同時に、弱さをも具えた人間である。二人の確執の発端となり、アキレウスの怒り、そして戦闘の遠因を招いたのは、一人の乙女をめぐる両者の対立であった。この所有欲は極めて人間的なものであり、また彼らはおおむね自己の欲望を抑制することを知らず、このこと自体も人間の弱さの一つである。時として英雄たちは蛮行としか名状しえない行為に

71) Wili, 294.

走ることがある。殊にアキレウスは、その最も顕著な特性の一つである憤怒に駆られて、語部たるホメーロス自身をさえ辟易させることもある<sup>72)</sup>。戦場での勇武とこの蛮性は表裏一体をなし、高邁な騎士道がもてはやされる一方で、数数の殺戮、暴行が行われているのである。II.は人間の陥りやすい過悪の数々を英雄たちの姿を借りて教えている。と同時にホメーロスは、いま一人の英雄オデュッセウスをもって、徳と英知の意義をも教える。

rursus, quid virtus et quid sapientia possit,

utile proposuit nobis exemplar Ulixen.

反対に、徳が、英知が何を為しうるかについて、〔ホメーロスは〕あのウリックセウスを有益な手本として、我々に提示した。(Epst. 1, 2, 17-8)

Brink はこの Epst. 1, 2 を ‘the letter on Homer’ と呼称したが<sup>73)</sup>、もっともである。II. は人間の諸々の悪をあげて見せ、Od. は人間の英知の帰趨を教える。二大叙事詩解釈のこのようなパターンがホラーティウス独自のものではなかったことは、つとに指摘されている。これは、アンティステネースに始まり次いで犬儒派とストア派によって熱心に擁護された、ホメーロスに付託される倫理的意義に基づくものである<sup>74)</sup>。もちろんホラーティウスが、ホメーロス解釈のこの型分けを自分のものにしていないことは言うまでもない。同じ英雄という範疇に属しながら、アキレウスやアガ멤ノーンは一面において人間の狂気を象徴し、オデュッセウスは対立的に英知を象徴する。後者を、ストア派は、人間の生き方の理想を体現するものとした<sup>75)</sup>。少なくともここには、後期のホラーティ

ウスが哲学に関してストアへ大きく傾斜していたと推測させるものがあると言ってよいであろう<sup>76)</sup>。詩人はこの書簡詩において、ホメーロスが英雄たちに託した人間像が自分にとっていかに貴重なものであるか、余すところなく表現している。そしてこの人間観は詩人によって普遍化され、同時にローマの現実世界で独歩している。彼はホメーロスから読み取ったものを教師面してロツリウスに単に受け売りしているのではないのである。

オデュッセウスの子テーレマコスにまつわるエピソードにもこのホメーロス解釈が現われる。Epst. 1, 7 はマエケーナースとの友誼の機微に触れた作品である。数日だけ田舎に行ってくるとの約束を違えて、詩人はこの逗留を長びかせ、ローマで彼の帰りを待つマエケーナースを苛立たせる。矢の催促を受けた彼は、いくつかの例を挙げてこれに応じる。ともかく詩人は「自由な余暇を、アラビアの富と交換する」ような愚はしたくないと声明する (Epst. 1, 7, 36)。もしも自分の自由が損われるようなことになれば、との条件を内意して、これまでに頂戴したものを喜んで (laetus) お返しするであろうと続ける。かなり露骨な表現であるが、これは親密な友人間の応酬では許される範囲内のことであろう。とりわけこの返却は、もしなされるとしても、敬意 (verecundia) をもってなされるはずであると解される<sup>77)</sup>。ここで例の一つとして登場するのがテーレマコスである。スパルタに王メネラーオスを訪問したこのイタケーの青年に、王は馬の贈物を申し出るが、テーレマコスはこれを謝絶する<sup>78)</sup>。故郷のイタケーは、馬が自由に走り回れる平坦な土地はなく、草も十分でないので、馬を飼うには適さない。馬はスパルタにこそふさわしいのでお返しする、と言うのであ

76) Cf. P. Grimal, *Horace*, 1958, 54.

77) Becker (34) は Hor. の返事を好意的に解釈し、詩人と Maec. との結合は物的なものによってではなく、深い友情と尊敬に基づくものであり、仮に贈物の返却がなされるにしてもそれは両者の断交、あるいは Maec. に対する侮辱をもたらすことにはならないとしている。

78) Epst. 1, 7, 43. Od. 4, 601 以下。

72) パトロクロスの葬礼でトロヤ方の12人の若い戦士を殺して火中に投じるのはその一例 (II. 23, 22-4; 175-6).

73) C. O. Brink, *Horace on Poetry: Prolegomena to the Literary Epistles*, 1963, 224.

74) Kiessling-Heinze, ad loc. Becker, 38, n. 2.

75) Kiessling-Heinze, ad loc.

る。ホラーティウスはテーレマコスはこの振舞を、賢明で誠実な態度の手本として、すぐに自身に即して語るが、自分に関しては、彼一流のイロニーが発揮される<sup>79)</sup>。「小さい者(*parvum*)には小さな物事がふさわしいのです。私の気持ちに合うのは、もはや世界に冠たるローマではなくて、静かなティブル、あるいは平和なタレントゥムなのです」(44-45)。ホメーロスの語った場面をそのまま再現しつつ、ホラーティウスはそこから「人間にはそれぞれ分があり、これを守らねばならない」という節度、あるいは「適切さ」の教えを取り出している。

オデュッセウスに具わる英知は、ホラーティウスにとっては理想であり、従って完璧なものである。欠けるところのないこの英知を詩人は、自身を含む通常人の状況とは対立したものとして図示する<sup>80)</sup>。完全性は神々の属性の一つであるが、ホメーロスの伝える英知をめぐる考察の中で、ホラーティウスは、理想的な賢人と過誤に陥りがちな人間の群とを対立させ<sup>81)</sup>、この完全性を人間オデュッセウスに託し、かくして必ずしも英知によってのみ評判が高かったのではないこの英雄を、ひときわ高く評価している。オデュッセウスについては後述するが、詩人はこの英雄のうちに自分と相通じるものを何か見出していたのではないだろうか。Becker は、ホラーティウスがホメーロスを最もすぐれた倫理の教師であると語るとき、これは哲学教室の教科書の見解とは一致せず、ホラーティウス自身のホメーロスに寄せる偏愛(*Vorliebe*)に起因するものであると評しているが、介在するストア的なホメーロス観を斟酌してもなお、この*Vorliebe* 説は正しいとしなくてはならない<sup>82)</sup>。

ホメーロスを読んで、英雄たちに付託された人間性を正確に把握し、ローマ世界で生きる者

として咀嚼し、さらにこれを他者に伝える。この生活は単に詩人の生活というよりむしろ思索家のそれであり、この時期のホラーティウスの内部では詩人と哲学者が同居、ないし交錯していることは明らかである。かつて Wili はこの作品(*Epst.* 1, 2)に関して次のような評言を残した。「彼(ホラーティウス)は71行からなる一書簡詩にストア派の叙事詩評価を、サルスティウス=リーウィウスの歴史意識を、彼固有の経験を表現し、人間の最善のあり方を誓い、かくして詩人みずから観想的生活‘*vita contemplativa*’の生きた見本となるのである<sup>83)</sup>」と。この *vita contemplativa* をホラーティウスは「あえて知ることをせよ、始めよ」(*sapere aude, / incipe*, 40-41) という句をもって青年に勧奨する。そして英知を求める努力を怠る者は、ねたみ(*invidia*)もしくは情欲(*amor*)に悩まされるであろう、と決めつける。

そして、もしきみが夜明け前に書物と燈火を求めないなら、またもしきみの精神を学問や善の問題へと導かないならば、きみはねたみか情欲によって眠りを妨げられ(*vigil*)、悩まされるだろう。( *Epst.* 1, 2, 34-7)

ホラーティウスが若者に求めるこの「英知への冒険」<sup>84)</sup>をもって筆者は本章を結びたい。そして、特に問題の書簡詩が「ホメーロスに関する書簡」とも呼称されることを繰り返しておきたい。以上、表現その他の面で二詩人の関連を検討し、それが叙事詩、抒情詩というジャンルの枠を越えたものであり、ホラーティウスの諸所に見られる「ホメーロスのもの」が単に「ホメーロスの思い出」として簡略に片付けられる性質のものでないことを指摘した。両詩人の比較検討がテキストのすべてにわたって詳細に試られるべきであるとは筆者の管見であるが、しかしこの希望は筆者一人に限らないはずである。公よりは私を、大よりは小を、叙事よりは抒情

79) Wili, 82.

80) *nos numerus sumus et fruges consumere nati, / sponsi Penelopae...*(我々は地の実りを消費するために生まれてきた烏合の衆であり、ペーネロペーの求婚者らと選ぶところはない…。 *Epst.* 1, 2, 27-8).

81) J. Fontaine, 119.

82) Becker, 38.

83) Wili, 295.

84) *Id.*, 295.

を選んだホラーティウスが実作によって偉大であり、ギリシアの大叙事詩人がいわば逆作用を及ぼしていると考えられるので、この要求はなおさらのことである。

トロヤ戦争の英雄は枚挙にいとまがないほどで、ホラーティウスの作品においてもそのリストは長くなる。しかし、中でも代表的な人物が

アキレウスとオデュッセウスであることは明らかであり、また本章で、この両英雄が詩人によって一種対立的に扱われていることを述べたので、次章では両者を中心に考察を進めてホラーティウスの英雄観をうかがうことにしたい。

(以下次回)